



# 針葉樹會報

號六十六第卷通

南の人氣者

P E N

エム、ラコビツッア氏は言つてゐる。

「小さな老人がつつ立つてゐて、兩腕が櫂の様な恰好でブラ下つてゐて、ズングリした、肥えた身體の割には頭が馬鹿に小さな者を想像して御覽なさい。此奴が背には青みがかゝつた黒い上衣コートをはなり、その先が段々細くなつて尻尾の様になつて地面に引する。前はツヤツヤした雪白の胸當。立ち上つて、兩脚をフンばつて歩く時は、頭を始終振りながら剽輕なヨチ／＼歩きとなる。見てる誰もその愛嬌可笑しさに噴き出さずには居られなくなる。」

中學生の英文和譯の様で甚だ拙いが、これがスフェニンデの様子をハツキリ寫し出したものとされてゐる。

學名スフェニンデ、俗名ベンギンである。南アメリカからでも太平洋洲からでも南極へ志す人達の必ず出會ふ此の鳥、單調な航海や、氷上生活を賑はし慰さめる此の鳥。南の涯に棲む人氣者についてのウンチクを少し傾けて見度い。どうせ百科辭典をベラ／＼こめくつた位の甚だお粗末な蘊蓄でもあるし、六難しい事を云つたつて書いてゐる本人も分らず、讀む人も分るまいから、成るべく俗耳に入り易い所を、さも本當らしく、見て來た様に書くことしよう。

何故この鳥をベンギンと呼ぶか。色んな説もある様だが、十七世紀スペインの航海者達がベンギゴオと呼んだのが始めてとされてゐる。ベンギゴオとはスペイン語で「脂肪」と云ふ意味の言葉だそうで、寒い所に棲んでる爲か脂肪が多い處から來てるものらしい。

アナトール・フランスの著に「ベンギンの島」と云ふのがある。その序文には、一五九八年マゼラン岬に達した和蘭人が始めてベンギノスと呼んだとしてある。スペイン人とオランダ人では大分違ふが、兎に角大體似通つた呼名を與へてゐ

たものらしい。

最初に挙げた文章は、その外觀上の様子を述べてゐるが、上述のフランスの著書の是も矢張り序の中にその性質がうまく言ひ現してある。

「勿體ぶつた穏やかさ、喜劇的な威嚴、頼る様な人なつこさ、オドケた純朴、重々しく然もギゴチない身振、共に温順で、お喋りで、物見高くて、公事には出しやばり勝で、幾分かは優越感も強いらしい。」

此の兩方の文章を讀んでゐると、ペンギンの姿がアリくと眼の前に現はれて來る様な氣がする。そして非常に懷しくなつて來る。——皆さん、餘り笑はないで下さい——

佐々木邦の「愚弟賢兄」の中だつたと思ふが、ペンギン鳥は北極に住むかと云ふ問答が出て來る。今では南國産が常識となつてゐるが、例の「ペシヤンの島」の序文には、佛蘭西語でペンギンと云へばアルシツデ族に屬する北極地方のものを意味する。南極のスフェニシデ族を指すには「マンショ」なる語を用ひる。この「マンショ」をベンギンと呼ぶとすれば佛蘭西語のペンギンは何と呼べば好いのだらうかとアナトールは嘆いてゐる。が、兎も角も此の小説では北極地方のベンギンなるものが出て來るのである。

どうして南極丈けにゐて北極にはゐないのかはまだ分らないが初め同じものが一は南の方に移つてベンギンとなり、一は北に飛んで海燕か何かとなつたと云ふ事を讀んだ様に記憶してゐる。この後者が例の奥野氏得意とする所のロツベン島や、フランス氏の所謂北極産ベンギン邊りに化したのであるまいかと思ふ。

次にベンギンの種類である。一口にベンギンと申しましても數は多う御座んすと來る。何しろ是が鳥類學の分類から行くとベンギン目なるものをなしてゐる。目とは何れ位のものを云ふのか一寸調べて見た。

先づ鳥を分つて二となすとある。諸兄も一寸考へて見て貰ひ度い。鳥類を二つに分けるとする何であらうか。山鳥と水鳥か。飛ぶ鳥と飛ばない鳥か。或は羽の構造とか、脊椎とか、色々と考へるであらうがサニアラズ。僕も學者と云ふ者の高邁なる識見に驚いたのである。曰く、化石となつて残つてゐる鳥と現存の鳥と。古鳥亞綱と新鳥亞綱なのである。前者が例の「ロスト、ウアルド」に出て来るトカゲとカンガールがくつついた様なトテツもない大怪物で後者が人類と共に今生きてゐる鳥なのである。何と云ふ雄渾な考へ方ではないか（尤も新鳥亞綱の中にも若干の化石種もあるが）。次に新鳥亞綱が三類に分れる。一、扁胸類 二、有齒類 三、深胸類。此の中第二が化石種で現存のは一と三。一は駒鳥とか火喰鳥とか云つた類で、三が其の他の鳥である。だから今生きてゐる鳥が、若しも假りに民族主義的な觀念を持つて二つに分れて戰つたとすれば、砂漠の王者、駒鳥や火喰鳥やエミウの類が孤壘を守つてその他の鳥は全部共同戰線を張ることになる譯である。

第三の深胸類が更に二十四目に分れる。だから第一に屬しない鳥は全部どんな鳥でもこの二十四目の中に入れられる。（どんな鳥でもと云つた所で、月給トリや塵トリは別では是等についてはまだ學術上の研究が充分行届いてゐないらしい）

目がある。譯して人鳥目ある。蓋し名譯であらう。他の一つの燕雀目などは、つばめ、すずめ、もず、つぐみ、それから小鳥と云はれる程の大部分がこの目である事を思ふと、ベンギン目の中の種類も相當ある事が想像されるだらう。

だからベンギンと云ふと皆同じ様に思つてゐたが、身體の大小は勿論、眼のまわりの白い所が大きかつたり、小さかつたり、喉の下に黒い條が走つてゐたり、背の黒い羽毛に青の斑入りがあつたり、赤い嘴の横に白い點があつたり、勇敢なのや、大人しいのや、喧嘩ばいのがあつたり、色々なんだそうである。

種類も本によつて三つに分けたり、五種と云つたり、十二種類と云ふかと思ふ二十何種あるとか、素人の私にはどれに従つて好いのか見當がつかない。それに唯何種類あるとしてある丈けで名前を書き出して無いから猶一層分らない。

一番普通なのがエムペラーベンギンらしい。是は南極探検の本を見るさどれにも必ずエムペラーベンギンが出て来て挨拶をした

とか、隊員の無聊を慰めたとか、さある。シャクルトン隊の探検船エンデュアランス號が沈んだ時は是が何羽か出て来て異様な聲で空高く叫んで姿を消したさあるのは外の多くの愛嬌ある話に比べて、冰雪の地に一種の不氣味さを漂よはす變つた話である。

元來ベンギンの名前には立派なのが多い。今のエムペラーにしろ、キンクベンギンとか、ナボレオンベンギンとかある。その外にマルコニーベンギンと云ふのも居るが、無電のマルコニー氏と關係があるのかどうかは分らない。上野の動物園に來てゐるのはマゼランベンギンとしてある。航海王マゼラン氏の發見にかかる

ものか、マゼラン海峡産を意味するものか。學名で穿鑿すれば好いのだが未だ未熟の致す所で何とも申譯けがない。

南極にばかり棲むものかと思ふとそうでもない。南米の西海岸にガラバゴス島がある。是が赤道直下で此處にガラバゴベンギンがゐる。ガラバゴベンギンについて面白い記事を讀んだことがある。或動物園で二羽のガラバゴベンギンを飼つてゐた處が一羽が死んでしまつた。残つた一羽は友を失つて意氣消沈して、傍で見る目もいぢらしい位。そこで氣をきかして一枚の鏡を入れてやつたら己が姿を失き友と思ひ、嬉々として戯れ、元氣を恢復して、鏡の中の友達と二羽で仲よく暮したと云ふ話である。

何だか偉そうな事を書いて來たが、實はお目にかゝつたのは上野公園のマゼラン君丈けなのだから、嘘も休み休み言はないと本當にされないから此の邊で切上げよう。後は折を見て筆碁を新にして書く事と致しませう。

### 六月の關西針葉樹會例會から

六月十一日 如水會支部(大阪)にて開催

出席者 五十嵐、松木、太田、岡田、中島、黒田

今月の例會は五十嵐の送別會を兼ねて開催す。高木が日を間違へてゐたため缺席だつたが他は皆が集つて非常に盛大でした。如水會で何が面白いんだらうかと思はれる様な出鱈目の話をして後野田屋でお茶を飲んで別れました。特に取立てゝ報告する様な話もありませんでしたが、大分關西方の様子も變つてゐますから一人々の近況を纏めて報告いたします。

第一に五十歳だが、何時も一年二年しか先でない奴等が支店長だ文句を言つてゐたが、今度の京都行は單なる轉勤でなく「支店長代理」を云ふ肩書きなんだから僕等とは一寸階級違ふこそになつたわけだ。今度は餘り文句も云はれまい。彼氏の氣にしてゐる身體の方は近頃多少良いらしい。お醫者さんが出出来るだけ栄養分をとる様にと云ふので、毎日牛肉いくらとか、牛乳卵子をうんと飲んだり食つたりしてゐる。そのため食ひ過ぎて先日は腸を痛めたらしい。

高木はまるで元氣になつた。昔は見違える様に顔色もよく頑張つてゐる。何しろ調査課長が居ないので高木が課長格らしいから、忙しいはづです。

太田は相變らず秘書係とか人事係とか云ふんだが、デパートの人事と云へば相手が女子だから悪くはない役だと思ふ。綺麗な女を見てばかり居るので目が肥えたのだが、未だ良縁がない。關西方では獨身者は彼一人となつてしまつたのですから、何とかしてやらねばならないと思つてゐる。江戸ツ子なんだから關東の方で然るべき奥さんを探してやつて下さい。

次に若手の中島と黒田だが、二人共目出度二人者に相成申候。  
黒田は名まで變つてゐる。此頃は養子が流行ると冷かすと「僕の處は親戚なんでそう甘い話なんじやない」と辯解是れ努めてゐます。併し一人娘らしいから相當よい口なんだろう。中島は五月初めに二人になつたのだが、その歸りの早いこそ、五時になるかならぬに姿が消えると言ふ専らの評判だ！ 御二人の奥さんに見参して新家庭振りを報告したいんだが、僕は口が悪いから後で絶交

するなど云はれるこ困るから、止めます。これはドンちゃんに頼み度。

岡田は相變らず萬年ボーイだが、もう大分子供も大きくなつて頭も薄くなつた様だ。一日の會合の日も、關西の石炭會社の統制をやらせて居るんだと大いに氣焰を上げてゐたが、偉くなつたものだ。

最後に十合だが、これが一番甘くやつてゐるらしい。誰も知らぬ中に名前が變つてしまつた。聞く處に依れば四國は徳島の有名な某肥料問屋「森？」に養子に行つたと云ふことだ。いづれ近く大阪・東京でも披露がある由、肥料問屋の若旦那になられたわけです。しかしさした處は黒田から報告して貰ふことにする。

松木は春迄忙しいと云つてゐたが、最近は貸出を手控てるるので、一寸息抜きをしてゐる。子供が「ハシカ」だ百日咳だ大腸カタルだと、一時は弱つてゐたが最近は皆が良くなつて、元氣になつた。

以上の通り關西方の近況御報告申上候。右報告に不服のある方は精々辨解なり訂正なり書いて下さい。（六月十八日—三角）

### 武能小舎日記（一）

岩崎利一

以下は六月二日から五日迄武能小舎を中心歩き廻つた數日間の紀行です。このあたりは一寸妙な所で、殊に珍らしく思はれるのは、針葉樹が殆ど無く、ブナの林から忽ち灌木林になり、すぐ這松帶を變じてゐる點です。

此の小舎は新らしいだけあつて氣持も良く、急に山へ行き度く

なつて而もバー・テイーが出来なかつた時など一人來るのには、全くもつて來いの所です。積雪期殊に春のザラメ雪にゾン・メルシ一を驅つたら、全く此の世の極樂でせう。

○六月二日 今日は至極恵まれた天氣であつた。初めの中は清水峰に雲が引懸つて、仲々氣になつたが、峰の頂上で晝食を攝つてゐる頃にはすつかり晴れた。こゝからは遠く八海山を始め、巻機山、柄澤山が西側に見え、東側には凄い岩膚を誇る谷川岳、一之倉岳等が實に美しい姿を以て天空を截つてゐた。途中で國道と蓬峰道との分岐點が判然しなかつたので、つい國道の方をやつて来たのだが、その平坦で長いのには飽きくしてしまつた。もう二度とは通り度くない位だ。しかし湯檜曾川の源流地は美しい所だ。對岸に聳立する朝日岳（地圖の笠ヶ岳）は相當立派な山で、是非とも登つて見度いと思つた。美しい雲溪が處々に這登つてゐるが、部分的には一寸登り難き所がある。殊に大倉澤の北隣の澤は瀧の連續であつて、あれでは仲々困難を伴ふものと思はれた。

湯檜曾川は清水峰の下あたりで大きく東に迂回して、朝日岳（一九四五メートル）へ上つてゐる。この澤は容易に上れさうだが、上方は相當な篭であらう。しかしこからには、尾根傳ひに登頂する道が明らかに見えた。更に後で小舍番に聞いた所によると、武能澤の出合の對岸から笠ヶ岳（一八五二メートル）へ登り、それから朝日岳（一九四五メートル）へ行く道が開けてゐるといふ事である。明日行つて見ようと思ふ。今日途中で出會つた人達は芝倉澤を上つて來たら話によると仲々雪が多いとのことなので、僕も行きたくない

つた。晩は久し振りに快いヒュッテの一晩を味ふ。けれども矢鱈にラヂオをやられるには降参した。豪勢さも斯うなると却つて過ぎたるは及ばざるが如しで、南や秩父の静寂が懷しまれる。

○六月三日 今日も朝から良い天氣だ。目を覺すと小舎の窓から清々しい青空が覗く。天の底までも見える様だ。郭公や鶯の聲が盛にする。武能澤の渓聲と調和して實に快い初夏のメロディーを形造つてゐる。餘り天氣が良いので、谷川岳迄縱走することに定めて、七時半に小舎を出發した。少しヘイズが懸つてゐるが、蓬峰からは山々が良く見えた。武能岳への登りは一寸應へろが大きいたことは無い。笠の尾根だが、蠅の非常に多いのは嫌だつた。振り返れば昨日歩いた清水峰、七ツ小屋山あたりが眼近く見える。正面の朝日岳は堂々たる根張りだ。武能岳からはすぐ上に茂倉岳と一之倉岳が續いてゐる。

茂倉岳へ行くと晝になつたので、パンを食べて暫し附近を大觀する。山は雨の日も雪の日も決して悪く無いが、晴れた日が一番楽しい。今度の山旅にはすつかり天氣に恵まれたので、實に良い氣持だ。こゝからは谷川岳の西黒澤上の尾根が、くつきりと浮上つて見えて、何となく物凄い氣分を涌かせる。一之倉岳迄は譯は無い。しかしこから谷川岳への尾根はぼんやり歩くと非常に危い。修身の先生みたが、正に餘所見は禁物だ。一之倉澤の壁は相當に凄いものだ。沖の耳を通り越し、マチカ澤の乗越で、去年の苦闘を思出しつゝトマの耳に着く。こゝでは萬太郎山、仙之倉山への大尾根が眼前に眺められる。三人位のゲルツベで、冬縱走したら面白からうなど考へつゝ一服し、西黒澤に降り始めた。

こゝは去年とは違ひ全く雪の一片も無い。すつかり恐縮してしまつて、役に立たないヒツケルを持餘しつゝ、歩き難いゴロ／＼道を降つて行つた。夕方の湯檜曾川端を辿つてゐるさ、いつしか上高地の小路を歩いてゐる様な氣がして來た。今年は是非とも劍岳から槍ヶ岳まで縦走して、あの梓川の谷目指して這り込んで行き度いものだ。必らずやつてみよう。小舎に歸つたのはまだ六時頃で、小舎番は一生懸命せんまいを取つてゐた。全部で十何貫取つたさうだ。

### 山 岳 部 報 告 (六月)

#### 記 錄

(1) 谷川岳・朝日岳(六・一―六・六)岩崎

東鐵武能小舎に滞在して、清水峠や谷川岳迄の縦走や、朝日岳の登頂等仲々面白い山歩きをして來た。

(2) 甲斐駒ヶ岳・仙丈岳・鳳凰山(六・四―六・一)里見、木鳥

天氣が悪かつた爲に北澤小舎に三日も泊つて仙丈岳へ登つた。

#### 部 誌

#### ○定期部員集會(六月)

四日(金)於部室、出席者(本科六名、豫科八名)

十一日(金)於部室、出席者(本科九名、豫科四名)

十八日(金)於部室、出席者(本科八名、豫科五名)

今夏の合宿計畫について説明を行ふ。

廿五日(金)於部室、出席者(本科七名)

### 一橋山岳部昭和十一年度決算報告

會計委員 森川眞三郎

○收 入

前期繰越金

本科會部費

豫科會部費

同 追加豫算

大學會計補助金

部員費

本科  
豫科  
専門部

入部金

臨時收入

合計

○支 出

費

天幕及附屬品購入

ヒツケル購入

シユラフザック購入

石油ラティカス購入

テルモス購入

輪カシ及脊負子購入

カボツク購入

スコップ購入

四〇〇

一八〇〇

三二五

一二〇〇

一〇一・九〇

三四・七六

四二九・八八

六〇〇

二七〇〇

五五〇〇

三〇〇〇

九三・一二

五〇・〇〇

一〇〇・〇〇

三〇・〇〇

三〇・〇〇

九三・一二

ビトン・カービナ購入	八〇五	大學會計補助金	二五〇〇
食器類購入	六六〇	部員費	六〇〇〇
雜品	四四〇	豫科	二七〇〇
諸器具修繕費	一八〇五	入部金	五〇〇〇
日本山岳會費	四二五	○支出合計	三八一〇八
部室火災保險料	一八〇〇	○支入合計	一七〇〇〇
通信印刷費	四五〇	圖書費	二〇〇〇〇
會合費	一八〇〇	庶務費	六〇〇〇
臨時費	一二四六	圖書費	四五〇
雜費	一五〇〇	庶務費	二〇〇〇〇
涸澤合宿補助	一五〇〇	圖書費	一七〇〇〇
乘鞍合宿補助	一五〇〇	庶務費	一八〇〇〇
春山補助	八〇〇〇	圖書費	一五〇〇〇
次期繰越金	九五一	圖書費	一八〇〇〇
合計	七七〇八	圖書費	一五〇〇〇
登山補助	七七〇八	圖書費	一五〇〇〇
次期繰越金	四二九八八	圖書費	一五〇〇〇
合計	七七〇八	圖書費	一五〇〇〇
登山補助	七七〇八	圖書費	一五〇〇〇
次期繰越金	五〇〇〇	圖書費	一五〇〇〇
合計	三八一〇八	圖書費	一五〇〇〇
○收入	三〇〇〇〇	圖書費	一五〇〇〇
前期繰越金	七七〇八	圖書費	一五〇〇〇
本科會部費	五七〇〇〇	圖書費	一五〇〇〇
豫科會部費	一一〇〇〇〇	圖書費	一五〇〇〇
同追加豫算	一一〇〇〇〇	圖書費	一五〇〇〇

## 一橋山岳部昭和十二年度豫算

會計委員 佐々木 誠

## 記録

○六月十三日

鷄頂山(ケイアフ)

(高原越) 中川孫一

一ノ鳥居から辨天池(一五八〇米)までは一時間足らずの緩い登りで、しかも、其間約三十分はつゝじの群落の間を行く。辨天池附近池塘多く、又スキーに快適の斜面が多い。辨天池から急登三十分で狭い頂上(一七五五米)に著く。猿田彦命を祀つた石祠があり、御籠堂もある。信仰厚く四時參詣の行者が絶え

ぬらしい。低い熊籠の禪に蔽はれ、西、南、東の三方に開けた此山頂からの眺望はいゝらしいが生憎霧で何も見えなかつた。

山麓のドライブウェイ（今年秋から鹽原、藤原間に省営バスが通る）の完成と共に一遊に價する所である。

### 消 息

五十嵐數馬君 京都支店へ榮轉、住所は京都市上京區下鴨北園町四ノ五八。

森 健二君（舊姓十合） 森氏に縁組まれし由。夫人は田鶴子様 住居は徳島市通町壹丁目なり。

中島 孜君 五月上旬華燭の典を擧ぐ。夫人は邦子様、新居は

大阪市住吉區相生通二ノ六五。

### 定例集會

五月十三日 於如水館

出席者（會員）中川、吉澤一郎、村尾、矢作、近藤、金田、久保田、手塚、吉澤松次郎、増山、鈴木、小柳、林、柿原（部員）

望月、小谷部、森川、佐々木、榎本、岩崎

二ヶ月振りの集會だつた上に榎本の八ミリで洞澤合宿の新作及び例の上高地生活の作品などを觀賞し、大變に愉快な夕べだつた。續いて中川氏の發言にて針葉樹會關東代行委員を設ける事に一決し、中川、吉澤、村尾、近藤、金田、磯野、吉澤松、山口、園山、増山、鈴木、小柳、新羅、柿原の十四人が之に當ることとなつた。大體會務の下相談をする高等小使である。

### 定例集會

六月二日 於如水會館

出席者（會員）中川、吉澤、村尾、矢作、吉澤松、増山、鈴木 小柳、林、新羅、柿原（部員）望月、森脇、和田、日江井、大塚

山岳部へ天幕二張寄贈のため寄附金募集の件、家族大會開催の件を發表し承認を求める、後雑談例の如くして散會す。

關西針葉樹會例會 六月十一日 於如水會支部（前掲記事參照）  
家族大會 六月二十日 於豊島園

吉澤、渡邊、近藤三氏の御家族と新羅、學生軍原だけの小人數 乍ら愉快だつた。

### 定例集會

七月二日 於如水館

出席者（會員）吉澤、村尾、近藤、吉澤松、増山、鈴木、小柳、林、柿原（學生）望月、小谷部、小林、森川、岩崎、船本、日江井

談半ばにして附近に火事でもあるのか自動車ポンプのサイレン けたゝまし。後山岳部夏山合宿計劃剣行につき森川より説明あり。ビール十二本を飲み御機嫌麗はしく一同散會す。

### 「針葉樹、九號」編輯委員より

既に「針葉樹九號」は會員諸氏の御手許に一部寄贈いたしました故、御受取の事ご存じます。萬一未着の方がありましたら私宛御申出下さい。尙今回も幾分御賣捌きを御願ひいたす譯で、その分も夫々御送附いたしました。よろしく御願ひ致します。その分の代金は一部一圓五十錢で御座居ますが、整理の都合も有之御賣捌きの分の代金は九月末日迄に何卒私宛御送金下さる様御手配を願ひます。

杉並區阿佐ヶ谷五ノ六三 望月 達夫